三宅 正浩 (みやけ・まさひろ)

教育分野 (領域)

歴史学・考古学分野 (日本史学)

研究・教育のキーワード

日本史、近世史、古文書、江戸幕府、大名、徳島藩、蜂須賀家、岡山藩、池田家文庫

研究者としての私

私の専門は、日本近世史、特に政治史です。江戸幕府や大名を対象として、江戸時代の政治のしくみを担い手である武士のあり方に着目して研究しています。

小学生の頃から歴史が好きで、特に日本の戦国時代やヨーロッパ中世の十字軍などに興味がありました。大学に入ってから、語学の才能がないことを改めて認識し、必然的に日本史を専攻することになりました。そして、好きな戦国時代は趣味に留めておこうと思い、江戸時代の大名にも興味があったので、近世大名家に着目してその政治構造や幕藩関係について色々と研究しています。(※岡山大学には全国有数の大名家史料である池田家文庫があります!)

私の研究の特徴は、史料としての古文書の中で特に武家の書状を多用することにあります。通常、書状には年代が記載されていないので、内容から年代を割り出す必要があります。書状の差出者と宛先者がそれぞれどういう人物で、執筆された時点でお互いがどこに所在しており、その関係性はどうか。そういったことを逐一確認しながら年代を考え、内容を読み解いています。生の史料から、当時の感覚・認識に照らして歴史過程を紡ぎ出していくと、いわゆる通説とは違う実態が見えてくるが多々あり、その感覚を大事にしたいと思っています。

ところで、歴史学を学ぶ意義は様々にあるわけですが、私が最も重視したいと考えているのは、「現代日本社会を相対化する眼を養う」です。現在とは価値観の異なる過去の社会のあり方を知り、客観的に物事を見る視点を獲得することは、現在の国際社会における他者理解にも繋がるはずですが。また、私が専門とする近世という時代は、現代社会の「揺籃期」(物事の発達の初めの時代)といわれることもあります。現代社会の慣習や価値観がどのように形成されたのかを知ることは、これからの社会の行く末を考えるためにも大切だと考えています。

教育者としての私

私が担当する近世は、概ね豊臣秀吉の時代から明治維新頃まで、いわゆる江戸時代が中心です。他の時代の研究も同じなのですが、歴史を研究するためには、とにかく史料を徹底的

に読み込まなければなりません。史料とは、過去から現在に伝えられた歴史を考察するための素材となる資料のことで、日本史の場合は特に書状などの古文書や日記などの古記録となります。史料を正確に読み解くためには、もちろん前提としてのたくさんの基礎知識が必要となりますが、近世史の場合は、それに加えて全国に大量に存在する原文書（活字化されていない「くずし字」で書かれた文書）を読むことが必要となる場合が多くあります。つまり、筆で書かれた「くずし字」（最初は文字にすら見えないかも？）を読む訓練が必要なわけです。

いずれにしても、まずは史料を読めるようになることが最低条件です。そして、史料を読解し、そこから歴史的事象を考察していくわけですが、ここで注意してもらいたいのが、各自の主観で歴史を描いてはいけないということです。簡単な例を挙げれば、歴史上の人物の好き嫌いなどで歴史を判断してはならないということです（やってみると、これがなかなか難しいのですが）。過去の人々は、当然、現代とは違う時代の違う価値観の中で生きていました。その人々を現代の価値観で「判定」するのはひどいと思いませんか。

もう一つ、史料に基づいて論理的・客観的に物事を考え、卒論というかたちでそれを他者に表現して説得するという過程をぜひ主体的に経験してもらいたいと思います。史料を正確に読み込んで整合的に論理を組み立てる作業は、社会人としての基礎訓練になると思っています。

私が書いたもの

◇「江戸幕府の政治構造」（『岩波講座日本歴史』近世2、岩波書店、2014年）

徳川三代将軍家光の時代から五代綱吉の時代に至る時期の政治史を最新の成果に基づきつつ叙述しました。辞書的な意味での「大名」「旗本」「譜代」などの定義が、当時の実態には当てはまらないことを示し、実態としての当時の認識から、これらの概念の捉え方を再提示したことが一番の成果だと考えています。歴史に関する常識的な思い込みが、実は実態とは少なからず乖離しているということを暗に主張しています。

◇『近世大名家の政治秩序』（校倉書房、2014年）

学部卒業以来、私が十数年間取り組んできた徳島藩蜂須賀家に関する研究をまとめた本です。蜂須賀家文書という東京の国文学研究資料館が所蔵している大規模な史料群の中から特に近世前期の史料を網羅的に収集（東京に通ってデジタルカメラでひたすら撮影！）して分析しました。特に、大名家の家老という存在に注目したことが特徴です。家老とは、いわば家臣団のトップなのですが、他の家臣からは隔絶した特別な地位を与えられていたことも多く、主君である大名も遠慮するような存在でした。その家老がなぜ大名家に存在し、どういった役割を果たしていたのかを考えたわけです。